

神島二郎研究ノート

大 森 美紀彦

1. はじめに一問題の所在

神島二郎と言えば、アカデミックな研究のみならず、政治・社会評論の世界でも活躍し、戦後日本社会に広範な影響を与えた政治学者である。「アカデミックな研究業績」としては『近代日本の精神構造』（1961年・岩波書店）が代表的な著作としてあげられ、この著作を中心とした60年代から70年代はじめにかけた研究業績は政治学・政治思想のプロパーだけでなく、隣接の社会科学にも大きな影響を与えた。

一方政治・社会評論の分野では、『国家目標の発見』（1972年）、『常民の政治学』（1972年）、『人心の政治学』（1977年）、『日常性の政治学』（1982年）、『転換期日本の底流』（1990年）等を集められた評論に見られるように、戦後社会・戦後政治に対して鋭い警告を発し続けた⁽¹⁾。

神島の日本社会の現実への関わり方には二つのベクトルがあった。ひとつは、自らの学問の成果を武器に現実政治や社会の問題に警告を発するベクトル、もう一つは現実から政治理論を構築しようとするベクトルであった。前者のベ

クトルをもつ政治学者は数多い。しかし、神島が政治学者として稀有であったゆえんは後者のベクトルを持っていたことである。日本においては、欧米輸入の理論で現実政治が分析されることはあっても、日本の現実政治から逆に理論を形成するという研究はほとんど行われていないからである。

この点、丸山眞男の1970年までの仕事はやはり特筆すべきものであった。それらが面白かったのは、戦前・戦後の日本政治の分析において、現実と理論の往復運動があったからである。この結果、良し悪しは別として、丸山研究も1970年代までの仕事に集中する⁽²⁾。

しかし、丸山は1970年以降、『現代政治の思想と行動』（1956・57年）所収の論文にみられるような、理論と現実との往復運動という仕事を急速に行なわなくなっていく。1970年以降の丸山は、「歴史意識の古層」（1972）や「政事の構造」（1988）に代表されるような日本政治思想史の古典文献研究に沈潜するようになるのである⁽³⁾。

丸山が1970年以降現実と理論の往復運動を停

(1) 『国家目標の発見』（1972年・中央公論社）・『常民の政治学』（1972年・伝統と現代社）・『人心の政治学』（1977年・評論社）・『日常性の政治学』（1982年・筑摩書房）・『転換期日本の底流』（1990年・中央公論社）

(2) 丸山研究は引きも切らないが、近著では次のようなものがあり、いずれも1970年以前の丸山の著作に焦点をあてている。笹倉秀夫『丸山眞男論ノート』（1988年・みすず書房）・入谷敏男『丸山眞男の世界』（1998年・近代文芸社）・福田敏一『丸山眞男とその時代』（2000年・岩波書店）・長谷川宏『丸山眞男をどう読むか』（2001年・講談社新書）・水谷三公『丸山眞男—ある時代の肖像』（2004年・ちくま新書）・竹内洋『丸山眞男の時代—大学・知識・ジャーナリズム』（2005年・中公新書）・荻部直『丸山眞男—リベラリストの肖像』（2006・岩波新書）

(3) 「歴史意識の古層」は『日本の思想 6 歴史思想集』（1972年・筑摩書房）の「解説」として発表され、「政事の構造」は1977年に国際基督教大学のシンポジウムで初の講演発表、ついで1984年に「百華会」シンポジウムで講演発表、論文としてまとめられたのは1988年イギリスにおいてであった（『The structure of Matsurigoto : the basso ostinato of Japanese political life』THE ATHLONE PRESS 1988『Themes and Theories in modern Japanese history』所収）。『丸山眞男集別巻』（1997年・岩波書店）「年譜」参照。

止したのに対して、神島はそうしたスタンスを生涯維持し続けた。それは自らの社会的発言とそのリアクションに対する応答をあわせもったものであった。そうした神島のスタンスは、ある意味で「純粋なアカデミックな研究業績」の蓄積を妨げたのかもしれない。象牙の塔の高みから現実分析を行い、現実の政治状況に対する発言など行わず、図書館的資料に基づく研究を行っていれば、神島の「純粋なアカデミックな研究業績」はずっと蓄積されていただろう。「現実との格闘」の結果、政治学者の間で、神島の「アカデミックな研究業績」としては『近代日本の精神構造』のみが着目され、本論文で展開する「新しい政治学」の構築という研究生生活の後半生の営みには光が当てられてこなかった⁽⁴⁾。

ところで、『近代日本の精神構造』以降、理論と現実との往復運動で神島が目指していたものは「政治学の再構築」ということであった。そして、そうした研究スタンスを踏まえて密かに期していたのが「新しい政治学」をまとめた『政治原理』と題する書と、その「新しい政治学」に基づく現代政治分析を企図した『現代日本の精神構造』の出版であった⁽⁵⁾。

しかし、神島はその両方の課題を果たすことなく「新しい政治学」のエッセンスだけを「政

治元理表」というきわめて抽象的な形で残して世を去った。「政治元理表」の解析とそれを用いた現実政治の分析は、課題として残されたのである。それはきわめて深く重い課題である。

本稿は、そうした課題に応える準備として、主に『近代日本の精神構造』以降の研究で神島は何を企図し何を達成したかを整理することを目的にしている。本稿が多少なりともその深遠なく神島政治理論に分け入る手がかりとなれば幸いである。

2. 『近代日本の精神構造』の隣接社会科学への影響

『近代日本の精神構造』及び『日本人の結婚観』『文明の考現学』所収の、60年代から70年代はじめの神島の論文は、隣接の社会科学に大きな影響を与えたが、分野にわけてそれらを見てみよう。

①「ファシズム論」…丸山眞男の一連のファシズム論—「超国家主義の論理と心理」⁽⁶⁾、「日本ファシズムの思想と運動」⁽⁷⁾、「軍国支配者の精神形態」⁽⁸⁾等が戦後日本の社会科学に衝撃を与えたことは事実である。しかし1961年の『近代日本の精神構造』も、丸山には見られない庶民意識からのアプローチにより、「日本ファシ

(4) 大嶽秀夫は『近代日本の精神構造』以降の神島の「日本人論」を次のように評している—「後のいわゆる日本人論にしばしば見られるように（民俗学的研究を補うものとして第三部や本書の他の部分でも活用された）文学作品や伝記あるいは雑多な風俗描写といった資料が、一貫した方法なく引用され、思い付き的な評論に墮する危険がある。」（「神島二郎の近代日本『精神構造』の分析—戦後政治と政治学⑥」『U P』1987年12月・東京大学出版会）そこには神島の「日本人論」を「思い付き的な評論」とし一段低いものとする「アカデミズム」的な発想が見て取れる。大嶽には神島の「新しい政治学」構築の意図などは読み取れていない。

(5) 神島の1981年の年賀状には、次のようにある—「軍備増強論やソ連脅威論が高まるなかで、過ぐる15年戦争の記憶がなまなましくよみがえり、世の中がやがて急に雪崩れを起こしそうな気配を感じまして、昨年初め私は、この風潮を止めることは今ならばできるはずだと、本来の仕事を一時わきに置いて、軍備無用の現実認識をもって正面から立ちのける行動を起こそうと決心し、爾来一年間そのための執筆と講演にできるかぎりの時間をふりむけ遮二無二やってみりました。そして『私の話に感ずるところがあった人はすくなくとも三人の仲間をふやしてください』と、ねずみ講式に同志をふやすことを訴えてきました。その現実認識をさらに原理的に深化させるために本年は、本来の仕事に立ちかえって、日本の経験を中心にした政治学理論の再構築と現代日本の精神構造の究明に私は全力を傾注する所存であります。—（後略—）（下線筆者・『回想神島二郎』神島二郎先生追悼書刊行会・1999年・193頁に掲載）

『現代日本の精神構造』と『政治原理』の出版の企図を、筆者は神島自身から度々聞かされた。また『現代日本の精神構造』は「新しい政治学」に準拠するから『政治原理』の方を先に出版しなければならないとも話していた。

(6) 丸山眞男「超国家主義の論理と心理」（1946・雑誌『世界』）

(7) 丸山眞男「日本ファシズムの思想と運動」（1947・東洋文化講座講演）

(8) 丸山眞男「軍国支配者の精神形態」（1949年・雑誌『潮流』）

ズム研究」に大きな影響を与えた。

例えば、安部博純『日本ファシズム研究序説』(1975年)では、神島の研究は丸山眞男などと共に「近代政治学派」として取り上げられ分類されている⁽⁹⁾。

②「日本社会論」…社会学の分野では「第二のムラ」の理論、近代日本の「出世主義」、「単身者主義」の分析などが大きな影響を与えた。

1988年刊『社会学事典』(弘文堂)の神島二郎の項目には「天皇制ファシズムや日本の近代化を支えた民衆の精神構造の解明に、多角的視点から、また独自の概念(「第二のムラ」「帰嚮原理」など)を用いて取り組んでいる。」と記述されている⁽¹⁰⁾。「第二のムラ」は『近代日本の精神構造』でもっとも注目された分析概念のひとつであった。

竹内洋『日本人の出世観』(1978年)⁽¹¹⁾では、「日本人の出世観」を分析するために、神島が作りそして用いた多く概念が使われている。例えば、「世論民主主義と出世民主主義」(19頁)、イギリス社会のとらえ方(25頁)、「神人同格教と神人懸隔教」に関する加藤玄智の引用(32頁)、近代日本における「人格」の考え方(64頁)、「藤吉郎主義」(66頁)、「対群集的个人意識(75頁)」等である。神島の先行研究がなければ、この書は成立しなかったと思われる。

玉野井芳郎は『ジェンダー・文学・身体』⁽¹²⁾で次のように言っている—「第二に、市場産業

に囲まれたなかでの経済的自立と性の解放をとおして、人間の<単身者>化現象が急速な広がりを見せてきているのではないか。日本でこの単身者化の問題の重大性に着目した人は、政治学の神島二郎氏です。」玉野井はイバン・イリイチ⁽¹³⁾やアンドレ・ゴルツ⁽¹⁴⁾などの引用の文脈で神島二郎の「単身者主義」の議論を取り上げている。

③「家庭論」…『日本人の結婚観』(1969年・筑摩書房)は『結婚観の変遷』(『日本文化研究』第9巻・1961年・新潮社)を増補改定したものである。後に講談社学術文庫にも収められ広く読まれた。同書は大学の講義で様々な形で用いられたと聞くが、例えば『思想の科学・「家庭論」特集号』(1979年)に一文を求められているように、神島の「家庭拠点主義」は良く知られていた議論であった⁽¹⁵⁾。

④「民衆史」…日本の歴史学プロパーで、「民衆史」というジャンルが発展したのは1970年代である。色川大吉・鹿野政直・金原左門・松永昌三・布川清司・安丸良夫等の業績が次々に発表された。それらの著作の参考文献に『近代日本の精神構造』は必ず登場した。例えば「民衆史」を代表する研究者の一人である一橋大学名誉教授安丸良夫の主著『日本の近代化と民衆思想』⁽¹⁶⁾の「あとがき」に次のような記述がある—「私はさしあたってのテーマを、維新変革をはさむ近代化過程における民衆の意識ないし思想

(9) 安部博純『日本ファシズム研究序説』(1975年・未来社)

(10) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』(1988年・弘文堂) この事典では他にも「群化社会」「馴成社会/異成社会」「単身者主義」「桃太郎主義」等の神島が作り出した概念が載せられている。

(11) 竹内洋『日本人の出世観』(1978年・学文社)

(12) 玉野井芳郎「人間におけるジェンダーの発見」(玉野井芳郎監修『ジェンダー・文学・身体』・1986年・新評論所収)

(13) イバン・イリイチ Ivan Illich (1926~2002) ウィーンに生まれる。自然科学、神学、哲学、歴史学を修めた後、51年に渡米。さらにメキシコに移り、67-76年、国際文化交流センター(CIDOC)を開催し、教育・交通・医療の分野で、人々の自律性にもとづいて専門家による管理を無化する、現代産業批判を展開してきた(『脱病院化社会』著者紹介より・1979年・晶文社・金子嗣郎訳)。

(14) アンドレ・ゴルツ André Gorz (1924~2007) オーストリア→スイス→フランス。新左翼系理論家。サルトルらの実存主義の影響を受け、高度産業社会における全面的な管理と疎外からの人間の解放を唱え、周辺革命論を否定して労働者階級の革命性を力説した。『労働者戦略と新資本主義』(1964年)、『困難な革命』(1967年)など(『社会学小辞典』1977年・有斐閣)。

(15) 神島二郎「家族を自立の拠点として」(『思想の科学—主題 家族は人間解放にとって有効か』1979年3月号所収)

(16) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(1974年・青木書店)

の变革の問題に求めた。このテーマを選んだ一つの理由に、そのころ出版されたこの方面の二つの力作、神島二郎『近代日本の精神構造』とR.N.ベラー『日本近代化と宗教倫理』からうけた刺激があり、私は、神島氏ともベラーとも異なったやり方でこの問題に迫りたいと思ったということもある。」(293頁)

⑤「日本文化論」…明治から1990年代前半までの「日本文化論」をまとめた好著に南博『日本人論』⁽¹⁷⁾があるが、この書では神島の著作が三つあげられている。『日本人の発想』⁽¹⁸⁾と『日本人の結婚観』⁽¹⁹⁾『日本人と法』⁽²⁰⁾である。本書でこのように多くの著作がとりあげられている者は、梅原猛、河合隼雄、志賀重昂、津田左右吉、土居健郎、中根千枝、芳賀矢一、長谷川如是閑、福沢諭吉、ルース・ベネディクト、イザヤ・ベンダサン、丸山眞男、三宅雪嶺、和辻哲郎等であり、これらの人々と同列に扱われているのは、神島が「日本文化論」という分野にも大きな影響を与えている証になっていると思う。神島は『新・日本人論』(1980年)という共編著を出しているが⁽²¹⁾。ここでは、「馴成社会論」の提示というかたちで日本文化の議論に参入しながら、さりげなく彼の政治学に基づく主張—「非武装主義の現実性」「宗教的寛容の問題」「極東軍事裁判の意味」、「新しい政治学」の概念、「人心の政治」等をおりまぜている。

神島のこの方面の活動は、比較文明学会を通じて継続され、例えば、1986年には雑誌『比較

文明』に「日本文明論の認識枠組」という巻頭論文を寄稿している⁽²²⁾。

⑥「柳田國男研究」…神島が柳田民俗学の意義を精力的に説いた時期は、『常民の政治学』、『柳田國男研究』⁽²³⁾、『シンポジウム柳田國男』⁽²⁴⁾を出版した70年代前半である。それは「足下の現実を探る」⁽²⁵⁾学問として柳田民俗学を評価し、紹介するものであった。日本の政治を西洋からの輸入の政治学で解くのではなく、独自の理論モデルを構築するために、柳田から学ぼうとしたのである。柳田民俗学は、神島の言うように、戦前においては日本の現実調査を行っていた唯一の社会科学であったからである。

一方、神島は「足下の現実を探る」学問として柳田民俗学を評価する反面、その問題点も指摘している。1961年に雑誌『文学』で、神島は「所与と課題」という問題を取り上げている⁽²⁶⁾。民俗学にとって重要なのは民俗事象という「所与」ではなく「課題」である。その認識が民俗学に欠けている。1986年の「戦争と民俗」⁽²⁷⁾は、戦争と民俗はどう関わるのかという「課題」への回答を民俗学にもとめる、という上記の問題意識にそった論文であった。

3. 研究の時期区分

私は神島二郎の生涯の研究活動を以下のように4期に分けている⁽²⁸⁾。

①第1期(1941年～1946年)…1939年一高入学、

(17)南博『日本人論』(1994年・岩波書店)

(18)神島二郎『日本人の発想』(1975年・講談社)

(19)神島二郎『日本人の結婚観』(1969年・筑摩書房)

(20)神島二郎他共著『日本人と法』(編著・1978年・ぎょうせい)

(21)神島二郎「日本社会の特性」(『新・日本人論』1980年・講談社所収)

(22)神島二郎「日本文明の認識枠組」(『比較文明2』1986年・比較文明学会所収)

(23)神島二郎『柳田國男研究』(編著・1973年・筑摩書房)

(24)神島二郎『シンポジウム柳田國男』(編著・1973年・日本放送出版協会)

(25)神島二郎『政治をみる眼』(1991年・日本放送出版協会)4頁。

(26)神島二郎「柳田学以前」(『文学』VOL29・1961年・岩波書店所収)

(27)神島二郎「戦争と民俗」(『日本民俗文化大系第12巻現代と民俗』1986年・小学館に所収)

(28)この時期区分は『政治の世界』(1977年・朝日新聞社)の所収論文の配列をヒントにしている。神島自身は諸論文を、I 1958～1963、II 1965～1968、III 1970～1973、IV 1974～1976に4区分している。筆者は『政治の世界』の時期区分にそってオリジナルな時期区分を作成したが、1973・74年の区分については、神島自身と筆者の認識は一致している。そこが神島の研究人生の大きなターニングポイントであったのではないだろうか。

42年に東大入学。この時期の注目される論文に「古代研究」(41年)がある。44年に入隊、過酷な戦争体験を経て、引き上げ。47年に東大に復学。

②第2期(1947年～1961年)…近代日本を分析する「中間理論」の形成期。その集大成が『近代日本の精神構造』(61年)。

③第3期(1962年～1973年)…『近代日本の精神構造』のモデルの追試、「新しい政治学」構築の模索期。

④第4期(1974年～1998年)…「新しい政治学」(「政治元理表」)の形成期。遺稿は「柳田国男と丸山眞男を超えて」(98年)。

第1期(1941年～1946年)

「古代研究」(1941年)は、一高在学中に『護國會雑誌』に載ったものである⁽²⁹⁾。『政治の世界』では「私がまず現実につくことから学問を始めなければならぬことに気づかされたのは、今から三十七年前の1940年の夏である」⁽³⁰⁾とある。『磁場の政治学』⁽³¹⁾によると神島が柳田國男の名前を知ったのは「一高在学中のこと」であると言っているから、おそらく「古代研究」も柳田國男の影響下に書かれたのではないかと推測される。

もしアジア・太平洋戦争がなかったなら、神島の学問は「古代研究」からどのように発展していったであろうか。興味深いところである。

福島新吾はこの論文について次のように語っている—「その論文は当時の狂信的皇国思想とは無縁で、冷静に考古学、人類学、古代学などの基本文献を広く渉猟し、原始信仰、儀礼、神観を考察したものだ。その中で大胆にも古事記、日本書紀の神々や天皇の行為を原始宗教や呪術の例証にしたりする。検閲にかかっていたら不敬罪とされていただろう。こんな論文を1941年に堂々と発表させた安倍能成校長は器量があっ

た。そこには君が生涯多用した『帰嚮』概念や『支配する』というやまと言葉の『しらす』が早くも表れる。」と⁽³²⁾。「帰嚮」や「しらす」という言葉はすでにこのころ使われていたのである。神島が戦争に巻き込まれず、日本に関するこのような研究を続けることができたなら、『近代日本の精神構造』は生まれなかったけれども、「日本の政治と日本語に固執すること」による「新しい理論モデル」⁽³³⁾の構築はもっと早く進んでいたかもしれない。

しかし、1943年に神島は出征。東大入学翌年に入隊した戦争体験は神島を悠長な「古代研究」の世界に沈潜することを許さなかった。学徒出陣前に入隊し、「日々の戦闘の敗北にもかかわらず一中略—最終的な勝利を確信し、ゲリラになってでも戦おうとした」⁽³⁴⁾過酷な実戦体験を経て敗戦、そして捕虜となり、戦地フィリピンからの引き上げるのがこの第1期である。

第2期(1947年～1961年)

1946年帰国復員。戦争が終って、「多くの血を流してこの敗戦である。天皇は自決するにちがいない」⁽³⁵⁾と信じた神島の直感は裏切られた。〈なぜ日本はこのような戦争を行ったのか〉そして〈天皇の無倫理性はどこから来ているのか〉という分析に神島は心血を注ぎ込まざるをえなかった。そうした思いが神島をして『近代日本の精神構造』を書かしめたのである。

『近代日本の精神構造』を人は難解という。しかし、この書は本文が近代日本の社会と政治を分析する「理論」で、その「実証」が註で行われていると理解すれば、容易に読めるのではないだろうか。①「神人合一教・隔絶教」の比較モデル②「都鄙感覚」モデル③「桃太郎主義」モデル④「郷党閥→学校閥」モデル⑤「行政村・自然村・第二のムラ」モデル⑥「出世民主化」

(29)「古代研究」については、現在検証中である。

(30)前掲『政治の世界』282頁。

(31)神島二郎『磁場の政治学』(1982年・岩波書店)225頁。

(32)福島新吾「神島二郎君の思い出」(前掲『回想神島二郎』所収・50頁)

(33)前掲『政治の世界』281頁。

(34)前掲『政治の世界』10頁。

(35)神島二郎『近代日本の精神構造』(1961年・岩波書店)あとがき

モデル⑦「家族国家観」モデル⑧「若者組」モデル等々、数多の仮説が提示されているのである。

本書は「足下の現実を探る」という柳田民俗学の方法論に基礎付けられるとともに、神島自身が「方法的に影響を受けた」と述べているように丸山眞男の「行動論的手法」の影響を受けている。「行動論的政治学」は、哲学的な書齋の学問から抜け出し現実の政治の分析に立ち向かった学派である。「行動論的手法」は「数量化」と同一視されがちだが、その最大の特徴は現実分析のための「理論—実証」という方法にある。選挙や大衆社会分析、比較政治等の分野で幾多のモデルが作られ、現実が分析された。丸山眞男はこうした行動論的手法を見事に輸入し、日本の政治を分析するための数々の「モデル」を立ち上げた—「自然と作為」「無責任の構造」「天壤無窮の皇運」「理論信仰と実感信仰」「たこつぼとささら」「であることとすること」等々、その「モデル」は全く前例のないものであり、人々に新鮮な驚きを与えた。そして、丸山はその巧みな表現力を駆使し戦後知識人のチャンピオンになったのである。しかし、日本の政治分析に使用した「モデル」自体は、西洋の歴史経験から生まれたものだったのである。

このへんの事情を神島自身は次のようにまとめている—「丸山さんは、ヨーロッパやアメリカの学者の仕事をよく勉強しまして、ヨーロッパやアメリカの学者がモデルをつくって、現実を見ているということを知っている。だから、彼らが作ったモデルを、ちょっとここを変えたらうまくいくんじゃないだろうか、というようなことで、つくり変えて日本にあてはめてみる。そういう作業をやれた人なんです。海の向こうの学説を誤解したりしながらその結論をただ受け容れただけで、そのモデルで間に合わないところはお説教で片づけていこうという、一種の政治家的学者とは違うわけですよ。丸山さんは

そうじゃなくて、合わないとちょっとモデルを変えてみるということをやっているわけです。そういうことで、私は非常に教えられたわけです。ところが、それじゃ他方では、現実を丹念にきちっと掘り起こすことをやったかという、かならずしもやってはいないわけです。」⁽³⁶⁾

神島はモデル構築を丸山から学んだことを率直に認めている。『近代日本の精神構造』はそういった意味で丸山の影響を受けている。しかし、神島がこうした方法論に基づく本書を見直す必要を感じるようになるのは意外と早くやってくる—「私は、この本（『近代日本の精神構造』筆者註）を書いたときに、前提にはもちろん政治理論があった。それは私にとっては、ヨーロッパやアメリカから受け継いだもので、それまでわれわれの先輩たちが信奉してきた既成の政治学の理論枠組をそのまま使っていたのです。既成の政治学の理論枠組は、そのままに前提にして、それだけでは、日本の社会の近代化はわからないから、中間に村モデルを持ってくる—それで解いてみせたのですが、私としては、それで十分うまくいったと思っていたのです—中略—私は、今まで考えていた政治学の理論枠組がどうもおかしいのじゃないかと考えはじめました。したがって、政治学を一度解体してばらしてしまっ、つくりなおしてみなければ、話にならないように思えはじめたのです。だから、政治学をつくりなおそう、ということで仕事を始めました」⁽³⁷⁾—つまり『近代日本の精神構造』出版の10年後、1970年前後には見直しを開始し、81年にはこのように「回顧」しているのである。

第3期（1962年～1973年）

『近代日本の精神構造』で高い評価を受けながら、本人はその方法に抗いを強めはじめる時期である。このころから各誌から寄稿、コメントをもとめられるようになったが、『日本人の結婚観』（1964年）は、神島の近代日本論を平

(36) 神島二郎編著『天皇制の政治構造』（1978年・三一書房）229頁

(37) 前掲『磁場の政治学』（1982年・岩波書店・序にかえて）

易な記述で普及させ、神島を戦後日本を代表する知識人の一人へと押し上げた。ただ、「丸山の弟子」と呼ばれることには最初から抗いを見せていた。それは単なる「プライド」などといったものではなく、研究の方法論という学問の根源にかかわるものだったと私は思う。神島は『近代日本の精神構造』で提示した日本の現実把握を普及させながらも、新しい方法を模索しはじめていた。

それは当時盛んであった日本人・日本文化をめぐる議論に参入しながら、同時並行的に行われたのである。しかし、神島はそうした日本人論・日本文化論に違和感を覚え、次第にその世界からも引いていく。つまり、当時の日本論・日本人論の普遍的な尺度の不在という現実を見て、「普遍的な社会科学の理論構築」の必要を痛感するようになるのである。そして、その「普遍的な社会科学の理論」である「新しい政治学」の模索を始めるのがこの第3期である。

この時期のいくつかの論文を、「新しい政治学」の構築という視点でみてみよう。神島は1965年に『現代日本思想大系10権力の思想』（筑摩書房）を編み、冒頭で「権力の思想」という解説文を書いている⁽³⁸⁾。そこで神島は、「国民の元気」という側面から近代日本の政治を分析し、明治以降の政治家達が「気」の動きを受けつつ、「統体意志」を発揮して上から統治していくダイナミズムを描いているが、これは「人心」と「政策」のとらえ方を示している興味深い。つまり国民の「人心」の動きを受けて、為政者は具体的な政策を立案していくのである。「人心」というものが「分った」者が「黒幕」になっていくダイナミズムも面白い。

西洋と日本の「権力観」の違いを明らかにする比較論を超えて、神島は「人心」と「政策」のダイナミズムをここで描いている。「帰嚮元理」形成の一里塚となる論文ではなかったかと私は思う。

また、西洋と日本の行政の違いという点に焦点をあてた論文もこの時期にある。例えば「政治広報と行政広報」⁽³⁹⁾「行政広報の理念」⁽⁴⁰⁾では、欧米と日本の「行政広報」の質的な違いが、描かれている。すなわち欧米では「立法国家」から「行政国家」への移行時に、「同意による統治」を確保するために「行政広報」が誕生したが、日本でのそれは「慈恵的官僚制」の土壌で、「中立」の名の下に、上から教化する側面が強いという。ここでは、『近代日本の精神構造』には見られない比較モデルが提出されているが、それは基本的には「中間理論」を超えていない。同様に「近代日本人の教育観」⁽⁴¹⁾は「機構の教育能力の極大化」と「私人の教育能力の極小化」というモデルで近代日本の教育を分析している。

そして、この時期もっとも注目される論文は「社会認識の構造」（1968年）⁽⁴²⁾である。ここでは「現実認識に有効なモデル」、「操作されるべきモデルは一つでなく複数でなければならず、操作的に複数のモデルによって照明するのでなければ、事象は適切に解析されない」という、「政治元理表」の前提になる考え方が提示されているからである。言わば「政治元理表」構築のための土台をなす論文と言えよう。

同様の意味で注目される論文は「組織と世代」（1971年）⁽⁴³⁾、「日本政治の復権」（72年）⁽⁴⁴⁾・「保守二党論」（72年）⁽⁴⁵⁾、「理論モデルの開発」

(38) 神島二郎「権力の思想」（1965年・筑摩書房『現代日本思想大系10権力の思想』所収）

(39) 神島二郎「政治広報と行政広報」（1966年・前掲『政治の世界』所収）

(40) 神島二郎「行政広報の理念」（1967年・前掲『政治の世界』所収）

(41) 神島二郎「近代日本における日本人の教育観」（1967年・『思想』第522号所収・前掲『政治の世界』所収）

(42) 神島二郎「社会認識の構造」（1968年・小学館『教育学全集第8巻』・前掲『政治の世界』所収）

(43) 神島二郎「組織と世代」（1971年・『組織科学』第5巻第二号・前掲『政治の世界』所収）

(44) 神島二郎「日本政治の復権」（1972年・『公明』第116号・前掲『政治の世界』所収）

(45) 神島二郎「保守二党論」（1972年・『中央公論』第1025号・前掲『政治の世界』所収）

(73年)⁽⁴⁶⁾である。

「組織と世代」ではこの時期の特徴である日本社会を分析する様々なモデルが登場する。それは①「馴成単一社会モデル」②「マジックミラー社会モデル」③「高密度社会モデル」④「高コミュニケーション社会モデル」⑤「政治社会の柔構造モデル」である。

「日本政治の復権」で新たに登場したモデルは「磁場モデル」である。＜馴成社会モデル＞も「異化」「馴化」という概念を使い精緻な議論になっていく。「保守二党論」では＜ハードマイルド（ソフト）モデル＞が登場するが、これらは「政治元理表」の土台を形成するモデルであった。

第4期（1974年～1998年）

1974年を第4期の始期とする理由は、『近代化の精神構造』⁽⁴⁷⁾が出版され、後に精緻化される「政治元理表」の初期構想が、この書所収の2論文で提示されたからである。それが「精神構造の概念枠組」および「日本の近代化」である。前者においては、まだダイアグラムが提出されておらず、「カルマ元理」「闘争元理」が抜けている。それが登場するのは『政治の世界』（1977年）に再録された改訂論文を待たねばならない。ここでは『政治の世界』所収の3論文「精神構造の概念枠組」と「近代化と政治的くまとめ>の原理」（前著では「近代化の概念枠組」）及び「日本の近代化—馴成単一社会の理論」を検討しよう。

「精神構造の概念枠組」では「政治元理表」の基盤形成が行われている。ここでは、「精神構造」を考えるにあたって「非言語シンボル」

の重要性に言及していることに注意を要する。ヨーロッパの政治が言葉に重きを置くのに対して、日本の政治が言葉以外を重視するという見方が反映されており、かつ思想と区別して、「精神構造」概念を構築した神島の意図がそこにあるからである。

「近代化と政治的くまとめ>の原理」は『文明の考現学』で提出した「近代化の3類型」の議論を再掲することによって、西洋と日本の文化の違いに注意をうながす。そして政治的くまとめ>の原理を抽出すべく生産労働と交信作用のダイアグラムを提示する。それを前提に後に「政治元理表」となる初期のダイアグラムが初めて提出されるのである。

「日本の近代化」では従来の日本文化論で使用された「馴成—異成社会モデル」、「マジックミラー社会モデル」、「高密度社会モデル」、「アニミズムモデル」等が、「政治元理」の構築にむけて駆使されている。

これ以降、「政治元理表」構築へ向けての論文集が次々に刊行された。『日本人の発想』⁽⁴⁸⁾、『政治の世界』⁽⁴⁹⁾、『日本人と法』⁽⁵⁰⁾、『政治をみる眼』⁽⁵¹⁾、『磁場の政治学』⁽⁵²⁾、『現代日本の政治構造』⁽⁵³⁾、『新版政治をみる眼』⁽⁵⁴⁾などである。そしてその最終的到達点が雑誌『向陵』に載った「政治元理表」（「柳田国男と丸山眞男を超えて」）⁽⁵⁵⁾だったのである。

4. 5つの評論集

神島の政治評論は前掲『国家目標の発見』、『常民の政治学』、『人心の政治学』、『日常性の

(46) 神島二郎「理論モデルの開発」（1973年・『思想』第588号・前掲『政治の世界』所収）

(47) 神島二郎編著『近代化の精神構造』（1974年・評論社）

(48) 前掲『日本人の発想』（1975・講談社）

(49) 前掲『政治の世界』（1977・朝日新聞社）

(50) 前掲『日本人と法』（1978・ぎょうせい）

(51) 前掲『政治をみる眼』（1979・日本放送出版協会）

(52) 前掲『磁場の政治学』（1982・岩波書店）

(53) 神島二郎編著『現代日本の政治構造』（1985・法律文化社）

(54) 神島二郎『新版政治をみる眼』（1991・日本放送出版協会）

(55) 神島二郎「柳田国男と丸山眞男を超えて」（1998年・一高同窓会誌『向陵』第40号）

政治学』、『転換期日本の底流』にまとめられている。その共通の特徴は新聞や雑誌掲載の社会批判・政治批判を通じ、構築途上の理論体系を現実の政治現象に突き合わせ検証していくという点である。自身の政治理論で現実の問題が解けるのかどうかという重い課題を課しているのである。以下、神島が各著書で対決した当時の日本社会が直面していた問題点を明らかにし、神島の孤独な戦いをたどってみたい。

①『国家目標の発見』は1956年から71年までの評論をまとめたものであるが、＜戦後民主主義の確立のための戦い＞が基調をなしていると筆者は考える。本書は50年代から70年代はじめにかけての政治状況に対する様々な視点からの警鐘というべき評論集であるが、それを象徴するのが「テロを生む社会・テロを押さえる社会」（『朝日ジャーナル』1961年2月13日所収）である。嶋中事件で引き起こされた社会的恐怖に対抗し、テロに対する特別立法を提案するこの論文は、神島の現実政治との対決姿勢を象徴しており特筆すべきものである。言論に対する暴力を絶対に許さないという神島の姿勢は、それこそが戦争で多大の犠牲をはらって獲得した戦後民主主義の重要な支柱であるという認識に基づく。『近代日本の精神構造』で提示された「出世民主主義」など、近代日本の社会形成の病理を解明するもろもろの枠組みがここでも使用されている。自らの構築した理論を武器として戦おうとする神島の意思が示されている。

②『常民の政治学』には、『国家目標の発見』とほぼ同時期の1953年～72年の評論が収められている。まず冒頭で「常民」の定義が提示されるが、全体としては大学における学問の

あり方、そしてそれを通じて日本社会の問題点を論じた評論集と言えよう。本書を通して神島は、自らが依拠する大学を論ずることで日本社会と対峙した。というのも、本書所収の諸論文は主に『明治大学新聞』『東大新聞』『立教』『法学周辺』（立教大学法学部学生向けリーフレット）『チャペルニュース』（立教大学）『立教ジャーナル』等に学生向けに掲載されたものだからである。

大学と学問を問い直し、それを通じて日本社会を問い直すという問題意識は言うまでもなく60年安保と68・9年の大学闘争によって形成された。60年安保に対しても、「68・9年闘争」に対しても、神島は学者として人間として学生の問いかけに真剣に向き合った。「68・9年闘争」以後を「一身にして三生を経る」の三生目としているのが、何よりの証であろう⁽⁵⁶⁾。「68・9年闘争」は何よりも大学における研究と教育を問い直すものであったが、神島はそれに真摯に向かい合い、自らの学問と教育を問い直し、「移動大学」などの大学改革にも実践的に関わっていった⁽⁵⁷⁾。神島は「68・9年闘争」を自らの問題として最も真剣に受け止めた知識人の一人であると思う。

③『人心の政治学』は1972年～76年の評論を中心にまとめられ、「新しい政治学」の構築という問題意識が前面に押し出された評論集である。そして本書は、日本政治の分析の柱となる「帰嚮元理」（この段階では「帰嚮原理」）を駆使した評論集である。分析の主たるターゲットになったのは、田中角栄の政治手法であった。角栄政治の分析の例として、「『人心一新』という名の金権政治延命策」（『朝日ジャーナル』1976年8月25日号所収）を見

(56)「福沢諭吉は『一身にして三生を経る』といったが、もしそれにならえば、私は一身にして三生を経たように思う。第一の変わり目は日本の敗戦である。信じて戦った対英米戦に敗れ、敗戦後戦争にまつわる人間的腐敗をつぶさに知らされて、軍事的な敗北だけでなく精神的な敗北を実感し、新しい運命を切り開かなければならなかったからである。第二にあげなければならぬのは、68・9年の大学闘争である。私はそのなかでもまれ、学生につるしあげられながらある種の回心を経験した。人はこれを大学紛争とよぶが、私はこの経験によって学生たちとおなじくこれを大学闘争とよぶことにしている。」（前掲『日常性の政治学』279頁）

(57)神島二郎「移動大学について」（前掲『常民の政治学』303頁）参照。

てみよう。ここでは、田中首相退陣後の自民党内の「三木おろし」の策謀を取り上げ、「議会政治」の本来の姿、政治の道義的責任、「金権政治」批判など行っている。自民党内で言うところの「人心」は、「新しい政治理論」における分析概念としての「人心」とは異なるとして、次のように結ぶ―「人心の流れはいまや括弧つきの『人心』（自民党の党内人心・著者註）を押し退けてせきあえぬ大河をなしつつある。私は正念場を迎えた自民党に禅家の言葉を贈ってこの稿の結びとしたい。『我に大力量あり、風吹かば即ち倒る』」―と。つまり、神島の言う「人心」は自民党「党内」の「人心」ではなく、政治の浄化をもとめる国民の間に醸成された「人心」なのである。本書ではこうした「人心」概念が駆使されて現実政治が分析される。「新しい政治理論」による分析の初期実践版と言えよう。

- ④『日常性の政治学』は1972年から81年にかけての評論をまとめたものである。軍備増強論・ソ連脅威論の台頭に代表される日本社会の「右傾化」に対して、神島は註の(5)に引用したように、敢然と立ち向かったが、本書はその闘いの記録ともいえるべき意義を持つ。神島は自らの政治学に基づき「非武装主義こそが現実的である」という認識の普及に全力を尽くした。それは主に本書の後半部「IV政治の流れのなかで」に収録されている。そこでは、戦後の国際紛争が生じる三つの条件が提示され、その条件に照らして日本が他国から侵略される危険性が皆無であることが主張され、そうした客観的条件下にある日本の進路が提示されている。

日本国憲法第9条の現実性についての神島の立論は現在においても有効であると思ふ。我々は神島の立論を繰り返し検証するなかで、政治学の立場から憲法9条の現実性・有効性を弁証していかなければならないと思ふ。

本書では、そうした議論とともに「新しい政治学」の構築過程もみることができる。巻

頭論文の「日本的共同社会の政治原理」（初出は『伝統と現代』1977年・1月号）では、「帰嚮原理」の分析可能性が全面的に展開され、「天皇政治」や「田中角栄の政治」がこの視点で分析されるのである。さらにこの時期すでに構築されていた6つの「政治原理」―「支配」「自治」「同化」「カルマ」「闘争」「帰嚮」―の現実政治を分析する枠組みとしての可能性が様々に示唆されているのである。

- ⑤1980年代はまさに激動の時代であった。『転換期日本の底流』には1980年から1990年の評論が収められたが、この激動の時代の底流に何があり、どう激流に対応するかという処方箋を示したのが本書である。ソ連におけるゴルバチョフの改革と米ソ緊張緩和で終わった80年代は、東西ドイツの統一、ソ連の崩壊、湾岸戦争の勃発という90年代の大変動が胎動するまさに激動の時代であった。日本においては竹下政権下の消費税導入とリクルート疑惑で自民党政治が大きく揺らぎ、1993年の自民党政権崩壊・細川内閣誕生へと繋がっていく。そして1989年には、戦前は「大元帥」として、戦後は「象徴」として昭和の歴史を形成した昭和天皇が逝去した。

神島はそうした状況の中で、自ら開発した政治理論で現状を分析しその動向を示しながら、日本や国際社会の進路についての処方箋を提出する。そこでは国内的には「単身者主義」「会社主義」をあらためること、国際的には「憲法第9条」に基づく武力によらない国際政治の秩序形成という従来からの主張が繰り返された。

現在の日本及び国際政治の現状を翻って見れば、神島の問題提起と処方箋はますます有効であるように思われる。非正規社員増大及び不景気を理由にした＜派遣切り社会＞の状態はまさに神島の言う「単身者主義」「会社主義」の極限形態であり、イラク戦争の失敗以降、国際政治秩序は非武力的方法で形成していかなければならないということが、現実によって一層明白になったからである。神島

の立論は現在でこそますます意義を持つと言えよう。

＜派遣切り社会＞について、若干説明しておこう。近代日本においては、労働者や国民はそもそも企業や国家の「消耗品」であった。神島の分析を一言で言えばそういうことになる。戦争はその「消耗品」を使い捨てにしたが、戦後「会社」が「国家」の肩代わりをして一時期国民の生活を支えた。そこで生まれたのが「会社主義」である。この「会社主義」は「日本株式会社」と諸外国に揶揄されるほど力を発揮し、高度成長を可能にしたが、やがて「会社」は戦前の国家と同じように労働者を「消耗品」と考えるようになっていった。こうして進行した「労働者＝消耗品」視の極限状況が「派遣労働」である。立派になるのは「会社」の建物ばかりであった。そして、こうした「会社主義」を支えていたのが、明治以来の国民自身の「単身者主義」的な生き方—つまり生活と人生の拠り所（「家庭」や「地域コミュニティ」）をもたずに、「会社」の提供するさまざまな商品（衣・食・住《ウサギ小屋だが》・娯楽など）を購入させられ、それによる一時の快楽を享受させられる生き方—であった。この「会社主義」と「単身者主義」を克服しなければ、いかに経済体制を改革したところで、根本的な解決にならないと私は思う。そして、この克服は日本の国際貢献の方向性とも関わる。つまり、「会社主義」と「単身者主義」は戦争への道と親和するからである⁽⁵⁸⁾。

さて、「原理的に深化させるために本年は、本来の仕事に立ちかえって、日本の経験を中心にした政治学理論の再構築と現代日本の精神構造の究明に私は全力を傾注する所存であります。」（註5）という言葉通り、神島は1980年以降政治理論の構築に入る。1985年から自宅で限られた弟子たちを集めて始められた研究会（「日本研究会の会」から「比較日本研究会」へ）はそうした神島の研究活動の一環であった。

90年代の政治評論の中で単行本にはならなかったが、忘れてはならないものとして、①「イラク問題と日本」⁽⁵⁹⁾ ②「転換期を読む」⁽⁶⁰⁾ ③「社会党は幻だった」⁽⁶¹⁾ ④「日本政府は幻だった」⁽⁶²⁾ をあげておこう。いずれも90年代に日本のかかえた重要な問題—湾岸戦争と日本の国際貢献、社会党の消滅と自民党政権の崩壊、官僚政治の弊害など—に対して自ら形成しつつあった政治理論で現実を分析したものであった。

5. むすびにかえて—1973年・福田歓一との対話

神島は1970年代に、「政治元理表」の構築へ向けての作業を本格的に開始するが、その出発点で、西洋政治思想史の泰斗福田歓一と対話している。二人で編んだ1973年のNHK大学講座のテキスト⁽⁶³⁾で行われた福田との対話を紹介し本小論を閉じたいと思う。

このテキストでは、神島は福田の展開する西洋史および西洋政治思想史と自ら研究したインド・中国・日本の研究をつきあわせ、「新しい

(58) 赤木智弘の『丸山眞男』をひっぱたきたい—31歳フリーター。希望は、戦争。』（『論座』2007年1月号）では、格差社会をリセットすべく戦争という手段があげられている。赤木には歴史や社会と戦うための「家族や地域の連帯」という発想がみられない。「単身者主義」的な生き方は戦争に親和する。戦争が悲劇しか生まないことは、過去の日本人の自ら歩んだ歴史が明白に物語っているのだが…。

(59) 神島二郎「イラク問題と日本」（東京新聞・1990年10月3日）

(60) 神島二郎「転換期を読む」（1994年・東京新聞に6回連載）

(61) 神島二郎「社会党は幻だった」（1996年・東京新聞に3回連載）

(62) 神島二郎「日本政府は幻だった」（1996年・東京新聞に7回連載）

(63) この神島二郎と福田歓一を講師とするNHK大学講座には以下の二冊のテキストが準備された。『政治学1—政治文化の類型と問題』（1973年4月1日・日本放送出版協会）と『政治学2—政治文化の類型と問題』（1973年7月1日・日本放送出版協会）である。

政治学」構築の準備作業—政治文化の類型化—を行っている。

福田との対話を通じ、神島はヨーロッパの政治史から「支配元理」「闘争元理」を、アメリカの現実から「自治元理」、インドの現実から「カルマ元理」、中国の現実から「同化元理」、日本の現実から「帰嚮元理」を導き出そうとしている（この段階で抽出したのはこの6元理であった。「エロス」「互換」「法」「知己」が加わるのは1998年の遺稿「柳田国男と丸山眞男を超えて」である）。

「支配元理」に基づく政治学に対峙することになった福田との対話は、随所に緊張感を感じさせるものとなった。テキスト冒頭には「政治のイメージ」についての議論が行われている。神島が「政治のイメージ」を「支配元理」から脱却させようとしているのに対して、福田はあくまでも「支配元理」に基づき議論しようとしており、緊張感が漲っている。

—神島 その問題をこの次に問題にしておかなければならないね。それはどうだろう。やはり共存関係が成り立つということ、そして共存関係を成り立たせるということは、結局、われわれの行動を意味あるものにすること、それぞれの行動に意味を付与することによって成り立つわけですよ。その場合に、共存関係が成立するという事は、われわれが行なう行動に意味を付与し、その意味をなんらかの形で共有していくということと絡まるのではないかね。

—福田 この問題を考えるうえでは、前提として、人間の間で実現している共存は、それ自体非常な逆説を含んでいることに気をつけなければいけないと思いますね。つまり、ただ平和に、お互いに仲よく暮らしているというものではないので、その反面にはいつも闘争の契機があるのだということです。複数の人間の共存は、ちょっとみると秩序のあると

ころどこにでも成立しているわけけれども、それを可能にしている秩序は、いつも闘争の契機を処理して成り立っているわけで、もちろんいろいろな政治文化によってそれぞれの方式はあるにしても、そこに支配関係が成り立っている。つまり人間の人間による搾取もあれば、人間の人間に対する支配もあって、逆説的にもそれが共存を保障していることは否定できないところです。それはいつだって共存の裏にひそむいわばネガの面だといってよいでしょう。」（下線筆者⁶⁴）

ここでは神島が人間の共存関係志向の強さと共存の意味付けの複数性を示唆しているのに対して、福田はあくまでもその背後にある支配関係を示唆しているように思われる。

丸山眞男は『政治の世界』で次のように言っている—「ただ紛争が純粋な理性的討議から暴力的対立の方向に近づくに従って、政治的な臭がするのは何故かという紛争の政治的解決がなにより相手に対するなんらかの制裁力を背景として、その行使または威嚇によってなされる解決であるからです。制裁力とは相手の所有するなんらかの価値を相手の抵抗を排して剥奪する力です。一中略一ですから権力現象は物理的暴力を行使しうる人間ないし人間集団だけに特有のものではないわけです。ただ物理的暴力はこうした制裁力の最も極端な場合ですから、政治的紛争は他の解決手段がすべて効を奏さない場合には、究極には暴力の行使に立ち至ります。その意味で暴力という物理的強制手段を最後の切札（ultima ratio）として持たない集団は、それだけ社会的価値の争奪をめぐる政治的紛争において後れをとることになります。」（下線筆者⁶⁵）

「政治的紛争は他の解決手段がすべて効を奏さない場合には、究極には暴力の行使に立ち至ります。」という丸山の政治のイメージ（最後の切札 ultima ratio = 物理的強制手段という政

(64) 前掲『政治学1—政治文化の類型と問題』11～12頁。

(65) 丸山眞男『政治の世界』（1952年・御茶ノ水書房・引用は岩波書店刊『丸山眞男集』第5巻・138頁）

治イメージ)を福田も共有していたのではないだろうか。そして、それこそが神島の越えようとしていた政治のイメージであったのである。

最後にこのテキストから福田歓一と共にしたための「開講のことば」を引用しておきたい。—「政治学は古くして新しい学問である。今日われわれが大学で講じ学生が学んできた政治学は、欧米の政治学の流れをくむもので、これはギリシャのプラトン、アリストテレス以来の伝統をもつものであるが、それも、行動科学、サイバネティックス、コンピューターの開発以来、いちじるしく変わってきた。ところが、そればかりではなく、世界政治のなかに第三世界が登場し、西欧世界にも若い世代が政治のファクターとして登場し、従来の権力観では処理しがたい問題が政治の檯舞台をおかしつつある。こうした状況のなかで、西欧のそれとは異質な政治文化の存在が、西欧のそれと肩を並べて政治学的考察を、いうなれば、強要しつつある。われわれ政治学徒は、もはや西欧政治文化の伝統の枠に止まることなく、それを超えて政治学的考察をすすめ、政治学の新しい展望を開かなければならないところに立たされている。われわれは、日本政治の考察と達成とを基軸に、ひろく比較考察を試み、それによって政治学の今日的課題に取り組むべく、鋭意努力してきた。というのは、日本政治についてなら、もし努力するなら、現実のデータをもって検証しやすいからである。しかしながら、われわれの望みは遠く、われわれの歩みは遅々として、いまだ腰だめの恨みをまぬがれない。そのような事情にかんがみ、今回、政治学の講義を放送するにあたって、対談形式により、問題の掘り下げに便し、それをテキストにし、われわれ二人で分担して講義をすることにした。もしこの講義が、いささかなりと現代政治への開眼に役立つことができれば、幸いである。

神島二郎 福田歓一」⁽⁶⁶⁾

こうした神島と福田の問題提起を、それに続く政治学者は果たして受け止めてきたであろうか。

(66) 前掲『政治学1—政治文化の類型と問題』及び『政治学2—政治文化の類型と問題』「開講のことば」